

【書評】

今村啓爾著『縄文の実像を求めて』

四六判 216頁, 吉川弘文館, 1999年10月刊, 本体価格1,700円+税

IMAMURA, Keiji. 1999. *In Pursuit of the Real Image of the Jomon*. Yoshikawa-Kobunkan, pp. 1-216.

長山 明弘

NAGAYAMA Akihiro

要旨 本稿は今村啓爾氏『縄文の実像を求めて』の書評である。本書では縄紋時代研究のさまざまな論題が取り上げられている。これまでの研究から筆者は、新石器文化に適合しない特徴が、縄紋文化に多いことを認める。とくに日本列島では、穀物生産ではなく、森林資源の人為的な増殖を含む高度な活用が社会的意味を持っていたと考える。こうした特徴を捉えて、筆者は「森林性新石器文化」を提唱する。また、筆者は縄紋時代の土器型式ごとに人口の変化率を算出し、縄紋文化が「繁栄」と「衰退」を繰り返していたことを再確認する。この現象が起こる理由については、自然環境の変化にともなって植物質食料の作柄が変動することを想定する。縄紋時代の不安定な食料生産に大きな変革をもたらしたのは稲作農耕である。筆者は、稲作が渡来した後、急速に普及していくのは日本列島の生態環境を知悉し、それに先適応した縄紋文化が背景にあったためと考える。

はじめに

本書は、縄紋時代像に大きな影響を与えた三内丸山遺跡が、一般に注目を集めてから6年後、考古学の本義を様々な形で揺さぶった旧石器捏造事件が発覚する1年前に上梓された。刊行から、10年近く経つことになる。本書をここに取り上げるのは、機宜を逸しているという見方もあるだろう。しかしながら、著者は土器の型式学的研究を基礎として、その背後に伏在する先史社会の様態を明らかにする研究を長年続けてきた。学問の専門・細分化が叫ばれて久しいが、それは斯学にも無関係のことではない。特に、考古学の伝統的な方法論を基礎にしながら、「社会」・「文化」などの抽象的概念を含め、縄紋時代の全般にわたって筆を進めた著作は、それほど多くない。そのような意味でも本書は、時代をとらえた概説書として総体的に評価されるべきである。

本書は、1970年代から考古学研究を続けてきた今村啓爾氏が、考古学を専門としない一般の人々に向けて、縄紋時代がどのような時代であったのかということを平易な文章で分かりやすく語った、はじめての著作である。著者の研究対象は、東南アジア、中国南部、日本の縄紋時代、古代貨幣、中近世の鉱山など地域的・時間的に幅広い。そのなかでも縄紋時代は著者の中心的な研究課題であり、前期の諸磯式、中期初頭の五領ヶ台式、後期初頭の称名寺式の時期について型式学をもとにした個別具体的な論文がある。また、本書でも取り上げている貯蔵穴、陥穴や打製石斧など生業に関わるものも著者の研究対象として挙げられる。

本書の構成と内容

本書は以下のような構成をとる。各項目について梗概と所懐を述べたい。なお、筆者自身は章・節の番号について特別に指示していないが、行論の都合から、便宜的に番号を付した。

縄文時代とはどのような時代かープロローグ

第1章 縄文時代の年代と環境

第1節 縄文時代の古さ

第2節 自然環境の変化

第2章 縄文時代の始まりと食生活

第1節 縄文時代の始まり

第2節 狩猟と漁撈

第3節 植物質食料の採集と栽培

第3章 縄文文化の展開と文化の水準

第1節 繁栄と限界

第2節 森林性新石器文化

第3節 社会と宗教

第4節 縄文文化の水準

第4章 農耕の意味とアジアの中の縄文文化

第1節 弥生時代への移行

第2節 アジアの中の縄文文化

縄文時代とはどのような時代か

本書の主題や方針が明示される。縄紋時代とはどのような時代であったのか、という大きな課題に対して、著者は最新の資料を用い、大胆かつ冷静に構想しようとする。この方針と密接な関係があるのは三内丸山遺跡の発掘調査（1992～）と、それに附随して起こった一連の「縄文ブーム」であろう。この大遺跡を考古学的方法論を用いて正当に評価し、マスメディアや一部の識者が一般の人々にまで流布させてしまった「夢のような縄文時代像」を正したいという意識が、本書の題名にも表れている。

第1章 縄文時代の年代と環境

考古学で年代を明らかにしようとする場合には、大きく分けて3つの方法が採られる。型式学的方法、理化学的方法、文献史学的方法である。多くの場合、これらの方法論が併用される。縄紋時代のように非常に長い時間を対象とする場合には、型式学と理化学の方法論が採られることになる。型式学的方法は、ひとつの遺跡、地点またはその地点における異なった遺物層から発掘された土器をひとつの資料とし、非常に多くの資料を観察・吟味して、相対的な変遷の順序である編年をつくることから始まる（山内1935）⁽¹⁾。一方の理化学的な手法には様々な種類があるが、今日ではAMS（加速器質量分析法）を用いた¹⁴C（放射性炭素）年代測定法が再び注目を集めている。この2つの方法論についての著者の考え方は、「¹⁴C年代論争」を紹介するなかで、やや間接的に述べられる。筆者は「考古学

研究の主体性」を貫いた山内清男・佐藤達夫氏の研究姿勢を評価している（山内・佐藤1962）。その一方で、 ^{14}C 年代測定法で得られた理化学的年代の整合性を検証するためには当時の自然環境との照合が必要であり、考古学の方法論にのみ拘泥して、その他の手法を無視することは許されないと述べる。筆者は、自然と人間の関係が縄紋時代における歴史の主題であると考えており、自然科学分野の具体的な研究成果を引用しながら、各時期の自然環境の変化について紹介する。

第2章 縄文時代の始まりと食生活

第1節では、縄紋文化の起源を考察する。筆者は土器の出現をもって縄紋時代の開始とする立場をとる。土器が生業基盤を支えた植物質食料の利用とつよく結びついており、縄紋文化の確立が土器の本格的な普及とほぼ一致していることがその理由である。縄紋土器が列島内で自生したものか、大陸から伝播したものなのかについて、筆者は積極的に言及しないが、土器の製作技術は北方起源であり、神子柴文化の石器を携えた集団の南下とともに列島に広まったと考えている。神子柴文化については、土器を作る技術はあるが、それをあまり発揮せず、石器組成から狩猟を中心とする生活が推定されるとしており、この時期を「土器出現期」と呼称する。著者の論理から推し量れば、神子柴文化は縄紋時代に帰属するということになるだろう。筆者は、土器の普及には最終氷期から後氷期への急激な気候変化（温暖化）にともなって進行した生態系の変化が重要であるとする。河川漁撈が定住化傾向を促進させ、針葉樹林から落葉広葉樹林への植生変化は可食食料の範囲を広げた。その結果、無土器時代に一般的だった狩猟に特化した石器組成から、打製石斧、石皿、磨石、凹石など主に植物質食料の処理に使用されたと考えられる石器が増加する。本書でも繰り返し注意されるように、縄紋文化といってもその様相は地域的・時間的に多様である。近年の発掘調査によって、南九州では草創期の段階ですでに土器が普及し、縄紋時代一般と遜色のない石器組成の確立、定住化などが生じていたと言われる。一方、本州では早期になってこれらの要素が普及し始め、東北地方や北海道では早期中葉にいたって土器が普及する。つまり、北方から来た集団が蒔いた種に、南方から陽光が注がれることで縄紋文化が開花し、気温の上昇とともに「縄文前線」は北上することになる。このように筆者は、土器製作技術の伝播と、製作・使用の普及はまったく別の現象であり、時間的にもずれるものと考えている。縄紋時代の土器編年と文化史的区分、そして ^{14}C 年代測定による時間の捉え方は、それぞれに無視できない幅を有するに至った。

第2節は、一般に縄紋時代における主要な生業基盤のイメージとして語られてきた、狩猟と漁撈について、遺跡・遺物を含めた実証的な証拠に基づき推論していく。遺跡から検出された陥穴から狩猟方法を検討し、縄紋早期の段階で開発可能な土地は狭まりつつあったことを予察した自らの研究、イヌやイノシシなどの飼育（キーピング）、土錘や石錘と網漁との関係、骨角製の釣針や銚と内湾・外海漁業の発達、貝塚から見えてくる集落の領域と相互の関係、それに特殊化した貝の採集活動についての考察などが紹介されている。個別具体的な事例についての考察もさることながら、筆者が強調するのは、縄紋時代の人々が、地域ごとに異なる環境に細かく適応して、資源を隅々まで開発していたという事実である。

第3節は「植物質食料の採集と栽培」についてである。藤間生大氏は縄紋時代の特徴を

「社会の停滞性と各地方における文化及び文化発展の仕方の同一性」（藤間1951）にあるとした。唯物史観による経済発展段階説から敷衍されたものであることを越えて、このようなイメージは一般の人々にも強い影響を与えてきた。しかし現在、こうした「原始的」な縄文時代像は「文化の多様性」や「豊かさ」という概念に置き換えられた。この転換は科学的な発掘調査の積み重ねによって徐々に更新されてきたものである⁽²⁾が、それを象徴的に示すのが三内丸山遺跡の存在であろう。筆者は、斯学との協同作業を進めてきた植生史の成果を紹介する。三内丸山遺跡では花粉や植物遺体の分析から、居住開始とともに遺跡周辺に存在したブナを主体とする落葉広葉樹林が消滅し、クリ林に更新されるという現象が指摘された。クリは自然の状態では純林を長期にわたり維持できないことから、人為的な樹種選別、長期間にわたる維持・管理の可能性が示された（辻1996）⁽³⁾。

一方、斯学の初期から、縄文時代の生業研究は農耕の存否に重きが置かれてきた。このことは、農耕は弥生時代になって開始されたという定説への挑戦という意味もあった。「縄文農耕論」には、中部・関東地方の集落の安定した様相をとらえ、土掘り具と推定される打製石斧と狩猟具である石鏃の多寡から推論された「縄文中期農耕説」、九州において大陸の農耕具と類似した石器や靱痕の残る土器の分析から雑穀栽培を想定した「縄文晩期農耕説」とがある。こうした所説は、次第にイネの靱痕の残る土器の探索、土壌中や土器胎土からの植物珪酸体の検出などによる間接事実の積み重ねに重心を移し、その関心も年代遡及の方向へ進んでいる。筆者は、リョクトウやエゴマ、ヒョウタンなど栽培された可能性のある植物が縄文時代の遺跡から検出されているという事実よりも、こうした植物が当時の人々の生活にとってどれほどの経済的価値を持つか—それが社会全般を変えるような生産の変化か—ということを重視する。その視点はぶれることがない。

第3章 縄文文化の展開と文化の水準

第1節では、前期から晩期にかけての具体的な資料と現象—集落に現れる環状構造、貯蔵穴、土器の器形分化、文様の発達、移動、土偶や石棒の発達など—を手がかりに縄文文化の展開を粗描する。「繁栄と限界」という論題は、著者の縄文時代のとらえ方をよく示している。「停滞」する縄文社会という認識は、高度経済成長と、それに附随して起こった発掘調査の増加により見直されつつあった。時の間隙が埋められ、ひとつの時代として俯瞰的に見られるようになると、景気循環と同じように上・下降する波が縄文時代にも敷衍された。これは臆説に過ぎないとしても、素朴な思考を核とした「繁栄」・「衰退」といった判断が、理念的に謳われる傾向があったことは、否定できないだろう。筆者は、ここに客観的データを導入する。生活の安定度や「繁栄」の第一の指標として、筆者は人口の増加を措定する。そして、方法論的にさまざまな問題や制約があることを認めつつも、発掘調査によって判明した竪穴住居址や貯蔵穴の数をもとに、数理的操作によって縄文時代の「型式」⁽⁴⁾ごとの人口変化率を推定する（今村1997）⁽⁵⁾。さらに、こうして得られた変動曲線を細別型式ごとと比較して、縄文時代には「繁栄」と「衰退」が繰り返り起こっていたことを論証している。これは膨大なデータを蓄積し、先行研究者や関連分野の知見を採り入れ、数理的な操作を経たうえでの結論であり、蓋然性という点で従来の印象論的な言説から一歩踏み出したものと言えるのではないだろうか。

第2節で筆者は、縄文文化を「森林性新石器文化」と位置づける。新石器時代（文化）

は農耕・牧畜の開始、土器の出現・普及や磨製石器の製作・使用などをその特徴としている（山内 1934）。一般に縄紋文化は新石器段階の文化と考えられているが、農耕・牧畜という重要な要素が欠けている。定義に忠実である限り、新石器時代ではないことになる⁽⁶⁾。ただし、この概念は、ヨーロッパで考案された時期区分であり、その区分法が日本列島にうまく適合しないことは、早くから注意されていた。十分な吟味を経ないまま慣用的に縄紋文化＝新石器文化と見做す現状に対して、筆者は「独自の歩みをたどった文化には固有の名称こそふさわしい」（p.131）と、無理に既存の術語に当てはめる必要はないと考える。縄紋文化は、穀物の栽培ではなく「増殖」という方法で樹木の実りを食料生産の対象とすることに大きな特徴があり、筆者はこれを「社会的な意味をもつ食料生産の段階」（p.129）と評価し、「森林性新石器文化」と呼称する。さらに縄紋文化が「狩猟採集や農耕牧畜という世界史の大区分自体を考え直し、人類の発展の経路を複線的にとらえることを要求している」（p.2）とも述べている⁽⁷⁾。確かに「相対主義」や「文化の多様性」が一般にも浸透した現在では、こうした行論には一定の説得力がある。しかし、「森林性新石器文化」の定義は、必ずしも具体的に示されているわけではない。現状では、三内丸山遺跡の圧倒的な情報量に多くを負った議論とも言え、反証可能性の是非を問う段階ではないと考える。また、著者自身も認めているようにクリ林の増殖を農耕と言えるのかという定義上の問題があり、「森林性新石器文化」を認めた場合でも、たとえばその起源や歴史性（始めと終わり）などについて、考古学的方法論から明らかにすることは容易でない。

「語りえぬものについては、沈黙せねばならない」

第3節の「社会と宗教」は考古学が不得手とする分野である。本書で採り上げられる集落の構造や祭祀についての説明は、基本的には1960年代に坪井清足氏によって提示された「縄文文化論」（坪井1962）につらなるものであろう。坪井氏は中期の「繁栄」を農耕に拠るものと推定する一方で、遺跡数が減少する後晩期に関して、縄紋文化が内在する生産力の「限界」のために発展性を失い「停滞」的な生活に陥ったものと考え、この時期に土偶などの非実用的な道具が増加し、抜歯習俗が広まることなども踏まえて後晩期を「呪術の支配した社会」と説明した。この解釈の是非については措くが、筆者も後晩期の冷涼化にうまく適応しきれなかった「森林性新石器文化」に「限界」をみており、「社会の規範と儀礼に支配され、個人の意志や自由の局限された世界」（p.163）を想定する。一方で徒に素朴な観念を述べることの危険性を十分に認識している著者は、現在の研究の情勢を手堅く紹介し、「交易」や親族組織、階層については社会人類学や、近年盛んになりつつある「社会考古学」の知見を取り入れた説明を行っている。

第4節「縄文文化の水準」では、関東地方の前期および中期末葉の時期を取り上げる。いずれも前の時期と比較して遺跡数が減少する。筆者は、気候の冷涼化にともなう植生変化のために、植物質食料が枯渇し、長期的な定住生活を維持できなくなったことを理由として挙げる。また、こうした厳しい環境に適応するため、人々は集落の立地、住居構造、石器の器種組成などを再編し、生業における狩猟や漁撈への比重を高めていく。また、このような文化的「衰退」の時期には、在地(A)のものとは異なる型式の土器(B)がA地域へ流入し、両者が遺跡内で並存することが多いという特徴がある。筆者はこうした現象が縄紋土器型式の分布が拡大する際のパターンのひとつであると考え⁽⁸⁾。文化的「衰退」は、

必ずしも斉一的なものではなく、多少の時間的なずれも想定されている。この場合「衰退」した地域(A)の人々には「繁栄」している地域(C)への移住という選択肢も考えられるが、土器から見る限りAからCへのまとまった移動の証拠は知られていない。筆者は弥生土器の移動現象と比較してみた場合、縄紋の場合は人口が希薄になった地域への小規模な流入でしかなく、流入先の地域的な復活にはつながらないとする。このことは、おそらく縄紋時代における集団間の領域や言語論的な問題が関係しているものと思われる。また、本節では階層や文明という概念についても批判的に考察する。これらは近年、ますます注目を集めている方面であるが、筆者の筆は冷静かつ慎重である。本稿で、そうした批判の詳細について述べるのは無粋というものであろう。筆者の意見は的確かつ厳しい。学史にあるように考古学の方法論とその手順を踏まない「考古学」の議論はどこでも成立しない。それを蔑ろにして所説を述べることも自由ではあるが、ときにそうした印象論が研究に混乱をもたらすこともあるようであるから、注意が必要である。

第4章 農耕の意味とアジアの中の縄文文化

人類の歩みという大きな枠組のなかで縄紋文化を理解するために、同じ時期のアジア地域および弥生時代との比較が行われる。弥生文化は、縄紋文化から継承した要素、大陸から渡来した要素、日本列島で独自に発達した要素からなる。その特徴は多岐にわたり、学史においてもその定義が幾度か更新されている。しかし、経済的な側面から定義すれば、食料を生産する農耕文化であり、主に稲が栽培された（山内1939）。水稻耕作は大陸で開始され、長い技術的蓄積を経たのち、灌漑施設、定型的な石製農耕具、機能分化が著しい木製農工具、あるいは農耕関連の祭祀具なども含めた体系的な文化として北九州に伝わった。その後、稲作農耕は東北地方北部まで急激なスピードで到達した。土器や石器の型式学的な分析を重視する立場からは、生活用具の大半に縄紋時代からの連続的なつながりが認められるため、製作者が大幅に交代するというような現象は想定できない。筆者も稲作農耕の主体者が縄紋系の人々であると考えている。縄紋系の人々は日本列島の生態系に適応し、定住的な生活、食料備蓄、生業の年間計画性、面倒なアク抜き技術をこなす勤勉性、機能に応じた道具を作る手先の器用さ、植物栽培の知識など、稲作農耕を行うのに必要とされる技能を身に付けていた。もちろん、稲作にかかわる特殊な技術体系は渡来系の人々から学んだものだが、こうした蓄積があったからこそ、稲作農耕はスムーズに受容され広がった。こうした縄紋文化の役割については鈴木公雄氏も指摘するところである（鈴木1984）。人類学では稲作農耕の開始とともに、爆発的な人口増加が起こった理由について、渡来系の集団の大量移住を想定する所説もあるが、形質人類学の中橋孝博氏は、狩猟・採集社会から農耕社会へ移行した集団に急激な人口増加が生じる民族例を参照し、数理的なシミュレーションを行った結果、少数の渡来であっても農耕にともなう高い人口増加率によって、在地集団との人口比が逆転する可能性があることを示した（中橋2005）。なお、こうした現象については、筆者も縄紋中期の急激な人口増加を例にして予察的に述べていることである。

おわりに

本書の主題のひとつに「多様性」がある。土器の観察をしていると、そうした概念がよ

く実感できるように思われる。全く同じ土器はひとつとしてないが、類似したものは多くある。自然もヒトも、社会もそういう意味では「同じ」である。私たちは「まとめる」と「分ける」ことを並行しながら、様々なものを認識している。本書は多様性の中に縄文文化を描き出そうとしているのだから、私でもできる限り多くの項目を取り上げて紹介し、あわせて自らの考えるところを記した。語りえることは僅かである。しかし、考古学を専門に勉強したことのない人であっても、本書を読めば縄文文化が安直なまとめを許さない、様々な貌を持っていることが理解できるであろう。また、ここから自らの興味を膨らませて、より専門的な内容へ進むことも期待される。

(ながやま・あきひろ 本研究科博士後期課程)

補註

- (1) 著者の型式学は、個体を「型式」のまとまりで捉えることに特徴があるように思われる。この場合、個体間の関係性は「型式」というまとまりによって、多く捨象されることになる。
- (2) 植物質食料が、縄文時代の人々にとって従来考えられていたよりも重要な経済的意味を持つということを、実証的に示したのは鈴木公雄氏である（鈴木1979）。その方法論は、対象こそ異なるが筆者による人口変化の推計と似たところがある。
- (3) 理論的ではあるが、クリの「栽培」については酒詰伸男氏が注目している（酒詰1957）。
- (4) ここでの型式が、数理的操作で「細分」されたものであることは注意すべきである。
- (5) 筆者の基本的な考え方については、今村1977bも参照されたい。なお、著者にとって、縄文時代の人口が自然条件の変化にともなって激しい増減を繰り返したということは、少なくとも1977年以来変わらない主張である。
- (6) 著者の2002年の概説書では、土器出現以前を「先土器時代」、以後を「縄文時代」と呼称すべきであると、縄文草創期は「世界の旧石器時代末期」に相当するとする。また縄文早期は「中石器時代」にあたり、前期から「新石器時代」である。この区分は食料生産が行われているか、いないかで区切られる（今村2002）。
- (7) このような考え方について、藤尾慎一郎氏がまとめている（藤尾2002）。
- (8) 註(5)を参照。

引用・参考文献

- (1) 石田英一郎・泉靖一編1968『シンポジウム日本農耕文化の起源』角川新書
- (2) 今村啓爾1977a「称名寺式土器の研究」『考古学雑誌』第63巻第1号 日本考古学会
- (3) 今村啓爾1977b「称名寺式土器の研究」『考古学雑誌』第63巻第2号 日本考古学会
- (4) 今村啓爾1997「縄文時代の住居址数と人口の変動」『住の考古学』同成社
- (5) 今村啓爾2002『縄文の豊かさと限界』吉川弘文館
- (6) 今村啓爾2005「年代学・型式学」『ドイツ展記念概説日本の考古学』上巻 学生社
- (7) 岡本東三1999「神子柴文化をめぐる40年の軌跡—移行期をめぐるカオス—」『先史考古学研究』第7号 阿佐ヶ谷先史学研究会
- (8) 酒詰伸男1957「日本原始農業試論」『考古学雑誌』第42巻第2号 日本考古学会
- (9) 佐原真1968「日本農耕起源論批判—『日本農耕文化の起源』をめぐって—」『考古学ジャーナル』No.23 ニュー・サイエンス社
- (10) 設楽博己編2004『歴史研究の最前線 vol.1 January 2004 揺らぐ考古学の常識—前・中期旧石器捏造問題と弥生開始年代—』吉川弘文館
- (11) 鈴木公雄1979「縄文時代論」『日本考古学を学ぶ(3) 原始古代の社会』有斐閣
- (12) 鈴木公雄1984「日本の新石器時代」『講座日本歴史1 原始・古代1』東京大学出版会
- (13) 辻誠一郎1996「古環境について」『三内丸山遺跡VI』青森県教育委員会
- (14) 坪井清足1962「縄文文化論」『岩波講座日本歴史1 原始および古代(1)』岩波書店
- (15) 藤間生大1951『日本民族の形成—東亞諸民族との連関において—』岩波書店
- (16) 中橋孝博2005『日本人の起源—古人骨からルーツを探る—』講談社選書メチエ
- (17) 林謙作2004『縄文時代史I』雄山閣
- (18) 藤尾慎一郎2002『縄文論争』講談社選書メチエ

-
- (19) 山内清男1934「新石器時代序説」『世界歴史大系 1 史前史』平凡社
 - (20) 山内清男1935「縄紋式文化」『ドルメン』第4巻6號 岡書院
 - (21) 山内清男1939『日本遠古之文化』補註付・新版 先史考古學會
 - (22) 山内清男1964「日本先史時代概説」『日本原始美術 I』講談社
 - (23) 山内清男1969「縄紋時代研究の現段階」『日本と世界の歴史第1巻』学習研究社
 - (24) 山内清男・佐藤達夫1962「縄紋土器の古さ」『科学読売』12巻13号